
魔女の翼

コスミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の翼

【Nコード】

N3371Z

【作者名】

コスミ

【あらすじ】

燃え堕ちる聖者の街から、魔女が巣立つ。聖者の未来、魔女の過去、それぞれの運命が交錯する、若き翼の物語。

1 黒煙

街の一角が燃えていた。

運河の向こう側、？聖者？達の居住区だ。幾百の屋根が力尽き、崩れ落ちていく。

目を刺す臭気と、狂気が風に混じっている。

悲鳴が起こらない。怒号だけが、炎をあおるように時折飛ぶ。火の粉と黒煙の渦々しい大群を、青空が受け止めている。太陽は、暗い流れの底で弱々しく輝く一枚の銀貨だった。

小高い丘にひしめく建物達が、文字通りの対岸の火事を静観している。

その中の一軒、屋根の斜面に反抗するような、屋上の小さなデッキに、少年がいた。

ひとり静かに、絵を描いている。

スケッチ帳を柵で支え、遠くの、熱と煙に侵される町を、細い木炭で写しとっていた。

顔と目線が、前へ下へと往復し、手は忙しく紙上を走っている。「やあ」

と、声が届く。

少年は、手を止めて振り返った。

声の主が、小さい足音で近づいて来る。

気軽で親密そうな挨拶だったが、少年の知らない人物だった。

フードの下の表情は、女性、それも若い。少年と比して、歳の近い姉といったところ。

北方に住む異人のような白い肌と、感情のない平淡な面立ちが、冬の山野を連想させる。その中で、濃色の瞳をもつ目の輪郭が、やけに際立っていた。

そして、そのちぐはぐな風体。

上半身は宵闇色のマントに覆われ、露になっている膝から下は、簡素なサンダル以外は何も着けていなかった。

まるで貧者が上等なレインコートだけを羽織ったように見える。しかし、その脚と素足には、日焼けのあとも、傷痕もない。汚れてすらいなかった。

「こんにちは」

相手の全身が見える距離で立ち止まり、そう言った女。その冷めた微笑をじっと見ていた少年は、驚く様子もなく、短く聞いた。

「こんにちは　あなたは？」

ひと呼吸ののち、女は、視線を街に動かし、声だけで答えた。

「魔女。名前は、アルエ」

その言葉が風に流されるまで、少年は、まばたきするだけだった。

「君は聖者だよね？」

アルエ、と名乗った女が問う。

目が合い、それが合図のように少年は頷いた。

「ええ。僕はミリグイン、家族からはミグと呼ばれます。あなたは、僕を殺さないようですが、どうしてここに？」

不穏な物言いだったが、アルエは平然としていた。少年、ミグと同じくらいに。

「これ、私、結構不思議な出会い方ではあると思う。君はそれにについて、何か思う？」

どうしてここに来たのか、それには答えないまま返した上に、意図の见えない問いだった。

それでもミグは、あまり悩まずに答える。

「いままで魔女に会ったことがないので、比べられないけど……。たぶん、良い出会いじゃないでしょうか」

言って、柔らかく微笑んだ。直後、その細い首に、革手袋が掴むように触れた。それは、揺らめく暗色のマントから突き出していた。

瞬時の接近で起こった風が、ミグの全身を撫でる。

手から木炭が落ち、二つに折れた。

アルエは、少年の顔を射抜くように見つめていた。
表情が消えている、試すような眼で。
「今から、君を、さらうとしても？」

2 家庭

デッキから屋根の中へ繋がる、小さなドアを開ける。

糸のように細く長い、蝶番が軋む音。

アルエはミグの後ろに続いて、彼の家へと足を踏み入れた。

床へ下りる短い階段の途中、

「……あまり言いたくなかったけど、私、君の家族までまもりきれ
る自信はない」

薄暗い屋根裏部屋に視線を這わせながら、アルエが小さく言った。
ひとつの窓から刺さる光の中で、塵の群れがうねり、舞う。

ミグが階下への梯子の前で足を止め、振り向く。

「自信なんかなくても構いません。ただの一方的なお願いですから。
可能な限り、気が向いたらでいいのです」

アルエは、少し声を固くした。

「家族みんな、聖者なんだね」

「いえ、兄は聖者ではありません」

ミグが緩く首を振る。顔を塗り分ける影が動いていた。

「兄は養子なのです。立派な人です、できれば彼を優先的に護って
ください」

「両親はいいの？」

アルエは眉をひそめていた。声は冷たく沈みつつある。

「両親は、聖者ですから。これから話せば、僕と同じように、兄を
優先して欲しいと魔女さんに言うと思います」

ミグはそう言って、梯子を降り始めた。その姿が見えなくなると、
アルエは息をつき、梯子へ歩を進める。

「なにが聖者だ……。愚者が狂人の間違いじゃないのか……」

口の中でつぶやきながら、窓の向こうの景色を横目に通る過ぎた。
梯子の前で覗くと、下の部屋は明るくて、絨毯の柄が見えている。
梯子を降りきったミグが顔を上げた。

そこへ顎で“どけ”と合図するアルエ。そして、飛び降りる。
着地の音はしなかった。

「父さん、母さん、聞いて」

ミグが向かう先に、二人の姿があつた。声を受け、机を片付けていた男性が振り返り、ベットに腰掛けた女性が大きな本から顔を上げる。

「……ああ、聞くとも」

男性が、アルエとミグを交互に見て言った。そして椅子を動かす。

「どうぞ、座りますか」

「結構です。休む暇はない」

アルエはミグに視線を向け、早く話すように促した。

「父さん母さん、僕は、今日からこの人と行動を共にします」

「どうして？ そちらの方は？」

女性が、むしろ微笑みをつくりながら聞いた。男性は「ほう」と言い腕を組んだ。

ミグは家族にいつも使っているのだろう、やや弛緩した優しい声色で言った。

「この人は魔女で、人さらいです。僕をさらうのです、だからです」
沈黙が降りた。

「……そうか」

「いつまで？ 私もついていつては駄目？」

男性が俯き、女性が訊ねた。

「いつまでかは知らない。あと、僕ひとりだよ、母さん。でも、この街を出るまでは僕ら皆と一緒に行動してくれるって、魔女さんが」
「魔女、か……。街の外へ息子を連れ出して、それでその後どうするのか教えてくれるか？」

アルエは、男性の目を真っ直ぐに見つめ返しながら答えた。

「それはわからない」

一度少し考えるように目を伏せ、続ける。

「まずは、北西へ向かうことになる。私は、師の託宣に従って動く

だけ。その先はわからないし、ましてこの聖者の子供をどうするか、
どうなるかはわからない。師を見つけて引き合わせるまでは、私が、
その身をまもってやるつもりだが、師に会えば、次の瞬間に首をは
ねるかもしれない。私は、それはないと思うけど」

アル工はやや難しそうに、ようやくそれだけのことを話した。

やがてミグの父親が、決然と口を開く。

「わかりました。ミグ、頑張りなさい。??魔女のお嬢さん、息子
を頼みます」

「私からもお願いいたします」

アル工は、居心地悪そうに、頭を下げる二人から目をそらした。

「……ああ。出来る限り」

と、そこで身体をぴくりとさせ、目を鋭く細めた。

「??誰か来た」

頭を振り、フードを後ろに下ろす。肩に届かない長さの黒髪が現
れ、光に曝された。

そして、目を閉じる。

と、そのアル工の髪が、どういうわけか少し膨らんだ。重力が減
少したかのように、全ての毛先が持ち上がった。フードを被ってい
た時と、ほぼ変わらないシルエットになる。

「魔女……」

と父親がかすかに漏らす。

「兄が帰って来たんだと思います」

ミグが明るく言くと、アル工は目を開け、動きが戻った。髪はそ
のまま膨らんでいた。

「バウ（大型の陸生鳥）に乗って来ている。今こっちの方で降りて、
繋いでいる」

ミグが意外そうな顔をした。

「そちらは裏手の洗い場です いつも繋ぐところとは違います」

「目立たないようにだろう」

父親の言葉にアル工は納得したように頷き、彼の横にあるドアへ

と歩き出しながら言った。

「大きな武器は持っていないようだ。下で待ち受けよう」

ミグが手を伸ばす。

「そこには鍵が??」

「かかってるね」

言ってアルエは、ドアに右半身を軽く寄りかからせて、膝を押しあてた。

金属の音がして、開く。

「来い。私から離れないように」

との声を部屋に残して、暗色のマントが外へ消えて行った。

三人は数秒後、その後を追う。父親が四角い鞆をひとつ持ち、母親は帽子を被りカゴ鞆を肘にかけている。ミグはスケッチ帳と画材入れの細長い紙箱を持ったそのまま。と、それぞれ旅をするには軽装すぎるが、逃亡なら場合によっては邪魔になりうる荷物の量だった。

廊下に出て、階段へ向かう。マントが迷いの無い足取りで先行していく。

「この現代にも、魔女はいたのね」

と、母親が感慨深げな声で言う。父親は重々しく頷いた。

「ああ、世界は未だ冷酷だ。ミグ、彼女の、なるべく近くに居てあげなさい」

ミグは、真っ直ぐな声で返事する。

「はい……父さん。出来る限り」

3 青年

アルエは、裏口のある炊事場で待っていた。

三人が入室して来るのを横目で一瞥し、顎でテーブルの向こう側へ行くよう指示した。そしてすぐまた裏口へ身体を向ける。

間もなく、慎重な音で鍵が開けられた。

最初は薄く、そしてゆっくりと、ドアが開く。

アルエはミグの顔をみて、それが彼の兄だと判断した。

長身の青年だった。彼はまず、家族達をその視界に認め、「……なぜそんなところに？」と怪訝そうに聞きながらも自然な動作で中に入ってきた。ドアを後ろ手に閉めようとして、凍りつく。

アルエに気づいたのだ。

見つめたまま、驚愕の表情を続ける。

青年は、良質ながら飾りの少ない服装で、身体の線もどちらかと言えば細く、肉体労働者ではないようだ。乗鳥用の靴の無骨さが目立つ。

歳は、成人を過ぎたくらい。

発達した額にかかる栗毛の下、若さによる熱と伶俐さを放つやや落窪んだ目が、彼が有望であることを鋭く物語っている。

ふと、意識が戻ったように彼はドアを閉めた。

「……誰だ？」

青年はちらと家族へ視線を振り、すぐに見知らぬ女へ戻す。

初めて受けた警戒に、アルエはほんの少しだけ満足そうな笑みを見せた。

「魔女。アルエだ」

青年は頬をひきつらせ、黙った。しかしやがて、魔女と名乗ったまだ若い女の全身を視線でなぞり、最後に目を、品定めするように無遠慮に睨みつけた。

「魔女、と言ったか？」

アル工は、あえて少し間を持って答えた。

「ああ」

青年は軽く手を持ち上げた。

「いや……まずは用件から聞こうか」

「そうだな……、これから街の外れまでついて行く。そして、ミグをもらう。それだけだ」

息を吸って、吐き、青年は眼光に冷たい怒りを宿した。

「両方、だめだね」

「拒否は不可能だ」

アル工の冷静な声。青年は、口元だけで笑った。

「なぜ？ お前が魔女だからか？ 悪いが遊んでやる暇はない。今すぐ出ていけ」

「拒否は出来ないと言ったはずだが」

青年は舌打ちし、裏口を指していた手をゆっくりと下ろす。

「言葉では足りないか……？」

瞬間のことだった。その発声を終えた太い喉に、刃の先端が触れる。直後に、風。

「言葉では足りない。ならこれでは？」

アル工が突き出す刃の先に、小さく声を送る。そして一度顔を背け、家族三人、特にミグの反応を探った。

彼らは、小さな驚き以上の感情も動きもついに見せなかった。

そのとき、青年の手がナイフの柄を打とうとし、アル工は見もせず上へ避ける。

切っ先が、次は青年の睫毛に触れた。

「はは……はははははっ！」

と突然、近距離で起こった割れるような笑い声に、アル工は眉をひそめた。青年が後ずさりながら、身体をかかえている。声を殺して、まだ笑う。背中が揺れている。

「……今日は、何もかも狂ってる。最高だ」

青年は上体を起こし、恐怖の余韻か、興奮して震える低い声で、

尚も皮肉を言いつのる。

「信じられん。まさか“本物の魔女”に会えるなんてな。それも、自宅でだ！　こんな滅茶苦茶なことがあるか？　まったく惜しいな、この感動を噛みしめている暇がないのが」

「……悪いようには、しないつもりだ」

アルエが口の中でつぶやく。調理用のナイフが、マントの中に消えた。

「当たり前だ」

と、青年の表情から笑みが消し飛ぶ。

「俺の家族に何かしたら、必ず殺す」

それは威嚇ではなく、純粹な宣言だった。

悲しくも温度を感じさせる目をして、アルエは慰めるように言った。

「私は何もしない。かえって今は、お前ら家族が生き延びる手助けをする」

「その代わりに、弟をよこせって？　悪魔でももっとましな取引をするぞ」

アルエは心外だとばかりに、困り顔をつくった。

「……交渉は街を出てからにしよう。よく知らんが、いま聖者が街にいると殺されるのだろう？」

と急かすようにドアを顎で指す。

青年は一旦はそれに視線を従わせたが、軽く首を振り、落ち着いた声で言った。

「ああ、少数だが、居住区へ行つて聖者を襲っている腐った輩がいるようだ、ここもいつまでも安全じゃない。それで、今役場に行つて確かめて来た。全ての街から聖者を追放する触れが出たんだ。皇都で、聖者が司祭を殺したらしい」

父親が声を上げる。

「何？　馬鹿な……そんなことがあるわけない」

「そうさ。たぶん捏造だろう」

青年は頷き、齒噛みした。

「誰かの陰謀に決まっている。何が“双方にとって最善の策？だ！好機とばかりに即日決議で“財産及び職、居住権など一切の権利を剥奪”なんて、あまりに狙いが露骨じゃないか。“全ての聖者はいち早く民の街から去り未開の地へ、そののち、国外へ出よ”だつて？ はっ、移動の為の支援は国がするそうだが」

「つまり街を出ればいいんだろう？ なら早く行こう」

アルエに遮られ、青年は不愉快な表情ながらも「そうだな」と同意した。

4 仕度

そして青年は、家族に保存のきく食料を集めるように言う。

「お前ら、食料の他は、家から持ち出すものはそれだけでいいのか？」

と魔女が聞き、棚の高いところを探している青年が答えた。

「幸い、これは俺が建てた家だ、何を残していこうが問題ない。皆には貴重品だけを持つようさつき出る前に言っておいて、まあ思った通り少なくともまとめてくれたな。そして仮に忘れたところで、皆を街の外へ逃がした後、俺が取りに戻ることもできる」

アルエは、青年が鉋物のような干し肉の塊を、テーブルにのった革袋の大口に押し込むのを見ながら、感心したふうに言った。

「ふうん。人は見かけによらないな」

「……どういう意味だ？」

「お前が石工が大工だなんて、思いもしなかった」

袋の中で、青年の手が止まる。母親が男たちにあれこれ指示を出しながらバウタマゴジャムのビンを革袋に入れ、続いてミグが拳大ほどの岩塩を入れに来て、また棚へ戻る。そしてそこにいる父親から「あのナイフを返してくれるか訊かなくては。あれは良い品だし大きさがちょうどいい」などと聞かされる。

ため息をつき、青年が口を開いた。

「この家は、俺の所有物だという意味で言ったんだ。魔女、お前はやはり見た目どおり異邦人か？ 言葉はまあまあ話せるみたいだが、充分ではないな」

「異邦人かもな。あと、そんなのわかっている」

「何？ わかっているとは、言葉の不自由さのことか？」

アルエはつまらなそうにテーブルに寄りかかり、棚の食器や食品をぼんやりと見始めた。

「ああ、それに前半もだ」

青年は、不意打ちを食らったようになりながらも瞬時にその言葉の意味をつかみ、奇人を見る目つきに変わった。

「な……。謀ったのか？」

顔を傾け、アル工は微笑んだようだった。

「大げさだな、からかったただけだ。私、ただの人間と言葉を交わすのは、初めてだから。どう反応するかと、好奇心だな。まあつまり、話すのは不心得だが、聞き分けるのは問題ないというわけだ」

青年は、魔女の横顔から引き剥がすように視線を落とし、鼻を鳴らして作業に戻った。

「この、悪魔女が……」

しばらく家族達が、慌ただしさのかけらもないのどかな調子で支度の音を鳴らし続ける。それをただ聞いているアル工がこぼす。

「それにしてもお前ら、そんなにたらたら準備して、本当に生き延びる気があるのか？ 聖者はともかく、お前くらいはもつと焦るべきじゃないのか？」

「ふん、人さらいの悪鬼に心配されるとはな」

「まださらってない。未遂の悪を誇張するな、誰が悪鬼だこのへば石工」

青年は、そうしたどこか真剣味のない悪口を聞き、あまりまともに相手をするべきではないと早々に悟った。

「いいかい“魔女”さん。まだそう焦るほどでもないんだ。このあたりでこの“聖者追放の触れ”を知る者はまだいない。俺が今朝いち早く、役場に聞きに行き戻ってきたからな」

「そうか。お前のバウは速いのか？」

青年は警戒の目を向けたが、すぐに気づいた。

「靴でわかったか。ああ、あれは“聖者のバウ”と讃えられる種だな、乗り手を選ぶが最高の脚だ」

「そうか……。なぜ聞いたかというと、お前がどれくらい速く移動できるかが重要だからだ。役場はここから距離がある、たとえば、向こうに触れが伝わった時に居合わせていた者がいて、すぐさまこち

らの方に来て、声を張り上げ流布しようとしたとする。すると、往復が必要なお前に比べて半分の距離で済む……おい、察した時点で引き継いでくれないか。私は話すのが苦手だと言ったはずだ」

青年が疲れたような声で返す。

「いちいち可愛くない魔女だな。まあこつちも、察しの通りとつくに、あんたの言いたい事はわかってる。いいか、このあたりの家々で聖者が暮らしているのはここくらいで、つまり良くも悪くもそう敏感ではない街区なんだ。聖者と密接な、運河の近辺でなら今朝の触れは大きく意味を持つが、このあたりに真つ先に触れ回ろうとする奴はまずいない。役人が正式に公布に来るのもまだかかる、それも確かめて来た。まったく、役場の腰の重さをありがたく思っ日が来るなんてな。で、どうだ、満足か？」

「このあたりで聖者が少数なら、目立つんじゃないか？ 余計に危険だろう？」

「ここらは野蛮な奴がそもそもない街区でもある、見た目どおりにな。ただ俺は今最高に危険な奴を目の前にしているわけで、何しろそちらのほうが断然恐ろしいな、さらに言えば当然、弟のことが心配で心配でしかたない。おい魔女、なぜ弟なんだ？」

加速する早口でまくしたてた青年の目に、鉄を思わせる絶対の敵意があった。

アルエは遊びの終わりを知った子供のように瞳を曇らせる。

「ミグは、鍵だそうだ。師が仰るにはな」

「鍵……？ どういうことだ？」

疑いが声に粘性を加える。アルエはテーブルに体重をかけ、頷く。「聖者の未来を救う、鍵、だそうだ。あとは、道々話してやる」

無音の中、青年の息だけが存在していた。それは一瞬で破られる。「そんなこと……で、ミグは、どうなる？ どうするつもりなんだ？ 悪いようにはしないと云ったよな？ それだけは今教える」

アルエは、青年の逼迫した様子を見ながら、どこことなく甘く目を細めた。

「幾日か預かり、必ず無事に返す」

とうに準備を終えている聖者達が見つめる先で、その声は響いた。ミグが肩越しに両親を見上げると、二人はちらと視線を合わせ魔女の言葉の意図を計ろうとしたようだった。

「ああ、そうか、本当なのか……そっちが冗談だとよかつたんだが」
青年は、腿に骨張った握り拳をめり込ませ、揺るがない魔女の瞳を見据える。喉元の刃と迫る火の手に同時に責められ、困窮の極みといった険しい顔をしていた。

向けられた刃は払えず、消せない火からは逃げねばならない。

魔女の差し出す凶刃たる予告?? 弟が奪われる。少なくとも数日、最悪では永遠に。

しかし、しかもその上、それだけを構っている時間もない。火は、事態は進み続ける。

なぜよりによって今なのか。

まさに悪魔的だと、青年は思った。

「……言いなりは癪だが、続きを聞くのは道中にしてやる。さあ皆、出発しよう」

5 街へ

青年を先頭に、皆は裏口から家を出た。途端に、日常から大きく様変わりした外気がそれぞれの身体を包む。耳には、人々が交わしている不安げに緊張した声が、生温い風につてどこからともなく運ばれて来る。そこが日陰になっているせいばかりではない、肌を粟立てるような不穏な空気が、石造りの街全体に充満していた。

「お父さん、荷車を準備してください」

ささやくように青年が言い残し、足早に、水の溜った洗い場の方へ向かう。

バウは脚をたたむ抱卵の体勢で休んでいたが、主人の姿を見るとすつくと立ち上がり身体を揺すった。長い首を持ち上げると、頭の高さは人の背丈をゆうに越える。鞍の位置も高く、青年の胸元までを隠してしまう。

バウは、まずまず落ち着いているようだ。水浴びをしたらしく、あたりの石畳には水の痕が散っている。今は、たくましい脚を彫像のように据え、視界を変えるため頭部だけが動いていた。

大きくも先細った、固く閉ざしたままのくちばし。そこから、多重の低い響きが混ざるバウ独特の唸り声がもれる。ただ、鳴き止めという、くちばしが開かないように絞めて、手綱と繋がる装具が取り付けてあるので、耳をつんざく咆哮は防がれている。市街で飼われる場合は、餌を与える時でさえ、この装具はわずかしが緩めない。「……そうか」

結わえてある手綱を解く青年から目を離して、アルエがつぶやく。遠い家々の点描を見渡し、口の端をわずかに下げた。

「この街並みを、しばらく見られなくなるのか」

「魔女さんはこの街で生まれたのですか」

そばにいたミグが瞳を動かし、訊ねる。それは静かな口調で、質問には聞こえないほどだった。

「どうかな……。そうだと良いんだけどね」

アル工はそう言つてすぐ、翻るようにその場から離れた。その動きの中でもミグと視線を合わせることはなく、どうやら発言を取り消したいようにも見えた。青年の方へと歩み寄り、ややうわずった声を発する。

「荷車なんか使つて大丈夫か？ 音も増えるし、目立つぞ」

青年はバウを引きながら、声だけで答えた。

「今さらこそそしたところで良いことなんかあるか。長旅なら絶対必要だ。多少は機動性も落ちるが、お前が護衛してくれるんだろっ？」

皮肉な笑みの中に齒がちらつく。アル工は肩を持ち上げて、澄ました声で返す。

「ああ、そうだ。だが、余計な人物との接触は避けてほしいな。お前の友人か？」

言いながらも家の外壁の角に、ぴたりと身を寄せた。青年は、そんなアル工の言動を受け不審げに立ち止まり、身構える。バウが歩行を妨げられて奇妙な足踏みをする。

「……何だ？ 誰か来るのか？」

慎重に視線を振り各方を確かめる。右側には隣家との路地、立て掛けてあつた荷車を降ろした父親とそれを見守っている母親、左側にはアル工とミグ、その他の人影は無かつた。再び、アル工のいる場所へ目を向けるまでは。

かすかな足音 角の向こうから、女性が現れた。

その背格好や顔立ち、ためらいがちに歩く動作から見ても、ようやく成人というような若い娘。肩に届く髪を首の後ろでひとつに結い、微かに紅潮している頬と耳が歩行で見え隠れする。

彼女は、ミグを視界に認め、次いで青年を見つけると、立ち止まった。

「クオロディ……」

安堵を味わうような発声だった。怯え歪めていた眉を上げ、目が

大きく開かれて潤む。両手を胸元に抱えて、引き寄せられるように足を進めた。

アル工はじつと動かず、しかし油断の無い眼差しで彼女の姿を追いつける。

青年は、少し視線を迷わせたが、最後は照れを押し込めた微笑で彼女を迎えた。バウと入れ替わるようにして全身を披露する。

「君だったか、エメレート。ひとりで来たのか？」

名を呼ばれた彼女は、一步の距離を残してようやく立ち止まる。

「ええ、奥様が、何があったか様子を気になさっていたから、だから私が代わりにと申して急いでここへ、ちょうど良い口実だったわ、私はあなたの家が心配で、だって、火が上がっているのは聖者街でしょう？　それで私」

「エメレート、いいか？」

顔には出さないが、青年は耐えかねたらしく言葉を遮る。アル工は、遠慮も何もなく眉をひそめ、ほとんど睨んでいた。

「時間があまり無い。これから説明するから、良く聞いて、街の皆に伝えてやってくれ。いいかい？　触れが出て、聖者は全員、街から追放になった。今すぐ、急いで街を出るよう、聖者のいる家に伝えるんだ。そして」

青年は熱心に言い聞かせている間、アル工から自分の姿を見えにくくなるように　対面するエメレートの身体に隠れるように立つ位置を動かしていった。

そして、優しく彼女の手を取る。

「そう、君ひとりでは駄目だよ。多くの人に伝えて、彼らにまた広めてもらうんだ。いいかい？　“なるべく多くの人”に頼むんだよ。どう、わかったかい？　わかったら頷いてくれ」

手が離れ、彼女は不規則な呼吸をしながら呆然としていた。が、やがて気がついたように小刻みに頷いた。「わかったわ、まかせてでもこれだけは教えて、ロディ、あなたはこれからどうするの？」

「愚問だな……曖昧すぎる」

アル工が、噛み締めた歯にごく小さな声をぶつける。青年も同じ感想か、眉間をやや狭めながらも、笑顔で快活に返す。

「とにかく、俺は家族を街の外へ避難させる。その後すぐ家に帰るかはお前さんの、長く皆と行動を共にして、あるいはそのままもう帰って来ないかもしれない。でも、必ず手紙を書くから。だから今はこの街区の聖者のために、頼むエメレート、君だけが頼りなんだ」強い目で見つめ、「もう行かないと……」と口惜しそうに、情感を込めてつぶやく。アル工の口元に張力が働いた。エメレートは、身を引き締め、ほんのわずか首を縦に振り、離れていく青年を追いかけてまいと堪え、ようやく数歩後ずさり、駆け戻って行こうとした。そしてアル工と目が合い、立ち止まる。

「……私は聖者。これから“ロディさん”に助けていただけになるので」

アル工は焦点の合っていない異様に柔和な目をしてそれだけ言い切ると、相手の反応も待たず、壁から身体を離し青年の後を追った。残された彼女は絶句して唇を振るわせながら、各人の顔に視線を飛び回らせ、答えを探している様子だった。再び歩み始めるまで、長い時間がかかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3371z/>

魔法の翼

2012年1月5日22時48分発行